



研究調査報告

水辺の生活環境史

消えたヨコハマ-四万十川漁師がとらえた環境問題-

安室 知

(非文字資料研究センター研究員)

はじめに

四万十川は日本に残された数少ない清流として全国的に知られる。しかし、川をめぐる人の暮らしや、川そのものがたえず変化を繰り返してきていることはあまり知られていない。四万十川はたえず人により利用されてきたし、現在まで「自然」のまま残されてきたわけではない。むしろ清流として喧伝される四万十川であるからこそ、今も昔も環境問題の最前線にあるといつてよい。昨年のメンバー共同による現地調査のとき、地元漁師に聞いた四万十川汽水域をめぐる近年の変化は、生活者レベルで環境問題を考えるとき示唆に富むものであった。

1. 四万十川のアオサとアオノリ

四万十川の川の恵みとしてアオサとアオノリは全国的に有名である。一般にはアオノリと一括されてしまうことの多いアオサとアオノリ（スジアオノリ）を四万十川の漁師はきちんと分けて認識している。生物分類上も、アオノリはアオサ科アオノリ属に属し、アオサ科アオサ属のアオサとは別種である。近年そのアオサとアオノリの漁獲について対照的なことが起きているという。

アオサは四万十川河口付近の汽水域が主たる漁場で、1月中頃から4月末までが収穫期となる。かつては天然のアオサがたくさん採れていたが、昭和34年頃に三重県の伊勢湾漁連が四万十川河口域に漁場を借りてアオサ養殖を始めると様相は一変する。その後、アオサは養殖物が主となり、四万十川の地元漁師も養殖をおこなうようになる。昔からアオサは伊勢湾が主産地として知られるが、30年ほど前に起きたいわゆる四万十川ブーム以降、四万十川のアオサは伊勢湾以上に有名となり、3年前には地域ブランドとしても登録されている。このように、現在四万十川で生産され出荷されるアオサのほとんどは養殖物であり、それは高度経済成長期に伊勢湾からもたらされた技術によるものである。

それは四万十川の汽水域に暮らす人びとが主体的に選択した変化であり、生業戦略であるといつてよい。厳密に言えば、栽培種の増大による生態系の混乱ともいえる

現象かもしれないが、当然それは環境破壊とは地元では受け止められてはいない。それはとりもなおさず、川と深くかかわり、そこを生活の場としてきた地元住民が主体的に選択したものだからである。ただし、そうした選択の是非は、畢竟、川は誰のものか（地元の漁業者だけのものか）といったこととかかわり、立場やかかわりの度合いにより判断の分かれるところであろう。国民的関心の高い四万十川であるだけにその問題は大きい。

そうしたなか、四万十川の汽水域には、この3年ほどの間に地元漁師の意図しない大きな変化の波が押し寄せている。それは漁師が生活の中に捉えた環境問題であり、その指摘は重要な意味を持つ。それは具体的には四万十川河口に存在した砂州の消失により引き起こされた。そこを生活や生業の場としてきた漁師の認識では、砂州の消失はけっして自然現象ではない。

その影響をもっとも受けたのが、アオサと並んで四万十川汽水域の産物であったアオノリである。むしろブランドとしては四万十川のアオノリの方が有名であり、四万十川河口域は日本における主産地とされてきた。そのアオノリが本来なら12月になると採集時期になるが、ここ3年間はまったくといってよいほど採れない。その主たる原因が砂州の消失であり、そしてそれを引き起こしたのが4年前に完成した600メートルに及ぶ突堤（図）であるというのが漁師の主張である。

2. 消えたヨコハマ

四万十川河口にはちょうど川と海とを隔てるようにヨコハマ（横浜）と呼ばれる砂州が伸びていた。それは図にあるように、緩やかに川の出口を塞ぐように張りだしていた。その重要性は、それが無くなってはじめて漁師により認識されたといつてよい。

四万十川は河口部において下田川が合流する。その合流部にできた入江が下田港として利用されている。四万十川からの洪水を防いで下田港をより安定したものとするため、下田川の河川改良と併せて、河川と港口の分離を目的に600メートルに及ぶ突堤が建設された。4年前のことである。これは高知県の土木事業としておこ



図1 四万十川河口 国土地理院 旧2万5千分1電子国土基本図

なわれたものである（事業全体としては平成25年まで続く一大プロジェクト）。突堤はヨコハマの付け根あたりから海に突き出すように建設されたが、それにより北東方向からやってくる沿岸流が遮断されることになる。

その結果、砂州が消失した。沿岸流が突堤により阻まれると、河口部に形成されていた砂州は四万十川の流れに抗しきれず、押し流されてしまったのである。もともとヨコハマは台風などが来るとその激しい波で消失することはよくあった。しかし、その場合にはまた2、3日もすると元に戻った。沿岸流の働きによるものである。そのようにヨコハマは緩やかに海と川を遮断する役目をはたしていた。しかし、4年前に突堤が作られて以降は、ヨコハマは消失したまま元には戻ることはなかった。それは近年撮影された衛星写真でも確認できる。

数年かけて突堤は沖の方から順に作られていったが、最後に岸と結ばれることで完全に沿岸流が遮断された。それまでは潮が通っていたのでヨコハマは保たれていたが、最後に岸と結ばれて突堤が完成するとヨコハマがみるみるうちに姿を消していったとされる。それを根拠に、漁師側は高知県に対して突堤建設とヨコハマの消失の因果関係を説明した。突堤の影響で砂州が消失したとする漁師側の主張は後には県にも認められることになる。

しかし、問題はヨコハマの消失にとどまらない。それ以降、四万十川河口部の汽水域ではさまざまなところで漁が不振に陥っているのである。ヨコハマの消失と漁業不振との関係は、いまのところまだ公的には認められておらず、当然、漁業補償の対象にもなっていない。

3. ヨコハマ消失と漁業との関係

漁師の主張では、突堤ができる以前つまりヨコハマが

緩やかに川と海とを隔てていたときには、川への潮の流入は穏やかで、したがって川水と海水とは穏やかに混じり合って四万十川河口部において広大な汽水域が形成されていた。その広大な汽水域は、アオサやアオノリといった緑藻だけでなく、アユをはじめ、エビ、カニ、ゴリ、アカメなど多くの魚が生育する場所として重要であった。その汽水環境が失われることで、これまで普通に営まれてきた漁にさまざまな影響が出てきている。

昭和30年代初めの頃までは、河口から7、8km上流ではアユの地引網がおこなわれていたが、現在そこではアユに代わってイワシが捕れるようになっている（同様に四万十川の汽水域で最大の魚類であるアカメも今では海水魚のイシナギといっしょに見られるようになった）。それはヨコハマが失われて潮が8kmほどのところにまで上ようになったためである。アユの産卵場（アユは汽水域に下ってきて産卵する）はそれほど位置が変わっていない（3、4kmは上流に移動している）ことを考えると、イワシが7、8km上流にまでやってくるということは海水と川水とがゆっくりと適度に混じることで作られてきた汽水域が大きく減退していることを示している。適度な汽水環境にあった河口域は、より塩分の強い水域になってしまった。しかも砂州がないために海から急激に潮の流入を見るようになったといえる。まさに漁師が言うように、突堤の建設により「河口は汽水ではなく海の入江」になってしまった。

そのため、四万十川では河口部から10kmあたりまでのアユの漁獲量は極端に減った。アユの漁は夏場が最盛期である。それ以外にも、例年10月15日になるとアユはトメカワ（止め川）つまり禁漁となるが、4、5年前まではトメカワの前には河口から10kmくらいのところでアユがよく捕れた。また12月1日はオチアユ（落ち鮎）の解禁日だが、その日以降もやはりアユがよく捕れた。こうして断続的ではあるが、ほぼ1年を通してアユを捕ることができていた。しかし、ヨコハマが失われて以降はまったく漁にはならなくなり、どうにか自家消費分を手に入れるのがやっとであるという。

突堤が作られヨコハマが失われることで汽水環境が大きく変わることになったが、その結果として、多くの魚類の生息域が影響を受けることになった。しかも、それは淡水魚だけでなく海水魚を含むさまざまな稚魚の生育場所となる汽水域での出来事だけに、四万十川にとどまらず、今後は海への影響も計り知れないと漁師は予測する。それが現実のものにならないことを祈念したいし、そうした状況に陥る前に早めの対策が必要となってこよう。その問題提起はすでに地元漁師によりなされている。